

タイトル：みんな同じ

学校名・学年：関西創価高等学校・3年

名前： 安達 清美

(本文)

私が通っていた小中学校では、近くの特別支援学校の同年代の子たちと交流するという行事が毎年二回ほど行われている。交流会では、一緒に楽しむことができるゲームやスタンプラリー、ダンス、歌、クイズなどを生徒たちが企画して楽しんだ。交流会の前になると支援学校の子たちの自己紹介の紙を見て、どういう子たちなんだろう、何ができるのだろう、何が好きなだろうと休み時間に友達と話していたことを覚えている。また、小学生の頃には、運動会でやったダンスも発表していたことも思い出の一つである。

私は小学六年生のときにやった夏祭りが一番記憶に残っている。前半はペアになった支援学校の子の車椅子を押しながら同級生たちが考えて作った輪投げや魚釣りなどのブースを時間いっぱい回って一緒に楽しんだ。後半には同じクラスのグループの子たちとよく考えて作ったボウリング屋さんを出した。当日までにシミュレーションや予行練習を何度も繰り返して、支援学校の子たちに楽しんでもらえるようにルールややり方を試行錯誤した。小さな力でもピンを倒せるように補助台を作ったり、車椅子に乗っていても簡単にボールを転がせるような補助台にしたりとたくさんのことを想定しながら作った。どうしたら支援学校の子たちに楽しんでもらえるのか、何が喜んでくれるのか、たくさん考えた。私たちが悩みながら考えて作ったもので支援学校の子たちが笑顔になってくれたり、喜んでくれるのを見るととても嬉しい気持ちでいっぱいだった。

毎年行っている行事ではあったものの私は毎回緊張していた。支援学校の子とのグループでの自己紹介のときにはうまく笑顔で話せていなかったり、時間が余って静かになってしまうこともあった。私の頭の中は、車椅子に乗っていたり、自分の気持ちを言葉にして伝えることがうまくできないような支援学校の子たちに対してどのように話しかけたらいいのか、何をしてほしいのか、何をしなければならぬのか、傷ついたりしないようにどうしたらいいのかと多くのことを常に考えていた。しかし、交流会での先生の挨拶を聞いて、そんなことを考えている事自体が間違えているのだと気がついた。

「今日はみんな同じ学年の子同士、たくさん一緒に楽しんで、仲良くなって帰ってください。」

この何気なく使われた「みんな同じ」という言葉が私には響いた。

私はそれまでずっと、支援学校の子のためにどうしたら、何をしたらと考えてきた。いつの間にか支援学校の子たちを自分たちとは違って障がいというハンディを持っているから私たち健常者が手助けをしてあげなければいけないと思い込んでいた。しかしそれは違った。もちろん、立場の弱い人や困っている人に手を差し伸べるのは当たり前のことだ。だが、勝手に自分とは違うと決めつけて、その上やってあげるというあたかも自分の方が上

の立場であるかのような考え方になっていた。ところが「みんな同じ」という言葉を聞いて何か特別にやってあげるのではなく、ただ同じ空間で同じことをやったり、一緒になって楽しんだりすることが大切なことなんだと感じた。障がいを持っている子と持っていない子ではなく、同じ学年の友達として接することが必要なんだと思った。

そこから私は交流会のことを考えるときにはいつものように自分たちがやって楽しいことは何かを大事にして考えるようになった。支援学校の子たちもこの交流会で私たちに何か特別なことをしてほしいと思っていなかったと思う。毎回、最後には支援学校の子たちが笑顔になってお別れをしてくれる姿を見る度に、短い時間だとしても同じ学年の一人の友達として一緒に遊んで笑い合うことを楽しみにしてくれていたのだと感じた。笑顔は言葉がなくても、心が通じ合えば自然と広がることを実感した。

世界には自分とは異なる、それぞれの美しい個性を持った人がたくさんいる。障がいを持っていたとしても、それはその人の個性だと思う。みんなと違うから可哀想なのではない。違うからこそ素晴らしい個性であり、それがその人自身なのだ。

障がいは単なる違いにすぎない。個性である。みんな同じなのだから。